



まちあるき型観光の可能性

— 「高松松平藩まちかど漫遊帖」を事例として—

山神 有香・原 直行

1. はじめに

現在、香川県では、「まちあるきツアー」などを通じて、香川の歴史・風土を味わう観光を「うどんツーリズム」と名付け、全国に情報発信し、香川県各地で定期的なまちあるき型観光が行われている¹。2007年度では高松市だけでも28コース、東かがわ市などの東讃エリアで3コース、丸亀・善通寺などの中讃エリアで14コース、観音寺の西讃エリアで3コース、小豆島でも4コースのまちあるきが開催されている。これは近年の観光における大きな流れの変化、すなわち団体パック旅行、通過

¹ エンジョイ香川ホームページ

<http://www.21kagawa.com/udon-t/index.html#>を参照。そこでは、「うどんツーリズム」を「地域の人にもガイドしてもらい、その街の歴史を学びながら、それぞれの地域に伝わる特色ある産品（例えば塩、醤油、うちわ、下駄など）に触れたり、味わったりしながらゆったりと「うどんの国のまち歩き」を楽しんでいただくもので、いわば香川版スローツーリズム」と紹介している。

型のマス・ツーリズムから個人旅行、滞在型・体験交流型のニューツーリズムの台頭に機敏に対応した動きである。高松市でも「高松平藩まちかど漫遊帖～そぞろ高松 ごゆるり参ろう～」(以下、漫遊帖)という名称のまち歩き型観光が2006年より始まった。

本論文では、筆者(山神)が実際にガイド(市民ツアープロデューサー)として携わった高松市の漫遊帖を事例に取り上げ、まちあるき型観光が実施されるまでの過程や実施状況を説明し、また、参加客へのアンケート分析を行うことによって、今後、日本におけるまちあるき型観光の可能性を示すことにしたい²。

2. 漫遊帖(2006年度)の実施

(1) 漫遊帖(2006年度)ができるまで

漫遊帖は、2006年秋から高松で始まったまちあるきツアーのことであり、プロではないその地域に住む人が市民ツアープロデューサーとしてガイドになり、それぞれの地域の歴史や特産品を紹介したり、味わったり、体験したりしながらゆったりと「まち」を楽しんでもらう、というものである。団体ツアー旅行で、観光名所だけ訪れるのではなく、市民の目線から見たおもしろいものや隠れた名店などに触れたりする。また、少人数型ツアーだからこそ可能になる、お店の人やガイドとの交流も漫遊帖の楽しみの一つである。

その漫遊帖がどのように作られていったのかについて述べたい(第1表参照)。2006年の春、栗林公園や玉藻城などの地域資源を有効活用するために、団塊の世代向けにまちあるきをしてみたらどうか、という話

² 本論文は山神(香川大学経済学部学生)の卒業論文をもとに、原が加筆・修正したものである。本文中の「筆者」は山神を指している。また、原は2007年度の漫遊帖3コースに客として参加した。

まちあるき型観光の可能性

が香川県にぎわい創出課や高松市観光課で出たのがきっかけである。当初の目的は大きく分けると2つあった。1つは、高松市に昔からあるお店や普段なかなか入りにくいお店、ガイドブックには載ってないまちを知るきっかけにしてほしいという、地域資源の発掘と活用であった。もう1つは、確かに香川は地味な県かもしれないが、香川はいいところだと住んでいる人が思うようになってほしい、自分が住んでいるところに目を向けるきっかけになればよいという、まちのにぎわいづくりであった。

第1表 進行スケジュール (2006年度)

進行スケジュール	
4月	高松でのまちあるきが提案された
5月	高松松平藩歴史・文化探訪推進協議会発足
6月	先進事例視察
7月～8月	各市民ツアープロデューサーはコースの企画提出 商店や施設などへの協力依頼 15コースに最終決定 タイトル名が決定
9月	チラシ・ポスター・ホームページ完成 ガイドセミナー研修 プレツアー実施
10～11月	開催期間
1月	反省会
3月	漫遊帖フォーラム (公開反省会のようなものである)

高松市には栗林公園や玉藻城など高松松平藩ゆかりの史跡が多く残っている。しかし、それぞれが独立した存在であるため、共同でイベントをしたりPRしたりできなかった。そこで、玉藻公園、栗林公園、香川

第6章

県歴史博物館、高松秋のまつり大名行列推進委員会、松平公益会、法然寺奉賛会、高松市歴史資料館でつくる「高松松平藩歴史・文化探訪推進協議会」が発足した。会則によると、この協議会の目的及び事業は「協議会は、高松松平藩で築かれた歴史・文化を継承し、これに関連する施設・団体等がお互いの価値を認識し、一体となって宣伝広報・イベント・埋もれた歴史文化の発掘など様々な取組みを行うことで、市民・県民に再認識していただくとともに、広域の住民主体の観光・産業のまちづくりに資することを目的として事業を行う。」とある。そして、その下部組織として、実際にまちあるき事業を行う市民主体の実行委員会が設置された。この実行委員会は2007年、正式に「たかまつ松平藩まちかど漫遊帖実行委員会」となる。会則によると、この実行委員会の目的及び事業は、「実行委員会は、高松松平藩で築かれた歴史・文化を継承し、市民が主体的に観光・産業のまちづくりや商品づくりに資することを目的として、まちあるき事業をはじめ、伝統工芸等の体験イベントやフォーラム等の各種事業を行う。」とある。

さて、実行委員会発足当初、集まった人数は香川県や高松市の職員を含め20人ほどで、大学生からシニア層までの幅広い年齢層であったが、ほとんど県や市職員の知り合いで構成されていたようである。第一回目の会議では、先述した協議会の目的について説明があり、まちあるきのテーマになっている高松松平藩の歴史・文化についての勉強会が行われた。

しかし、事業説明や勉強会だけではイメージがつかみにくいのを実状であり、もうすでにまちあるき型観光を成功させている長崎などを視察することになった。先進事例視察として6月に訪れたのは、長崎市の「長崎さるく博」と別府市「竹瓦ゆうぐれ路地裏散歩」であった。長崎さるく博とは漫遊帖が手本としたもので、市民が立案したコースを市民が案内する市民手づくりのイベントである。まちをゆっくり歩くことを

まちあるき型観光の可能性

通じて、歴史や文化に触れ、新しい発見をしてもらうという観点から生まれ、2006年には4月1日から10月29日まで開催され、長崎の観光客増加に貢献した³。

これらの先進視察を終えて、報告と意見交換がなされた。そこで、交通量が少ない道を選んだ方が良い・コースの時間としては1時間半から2時間が適当である、などの実際面での意見と、「点というより線のガイドをしよう」というコンセプト面でのキーワードが見え始めたのが、6月末のことであった。史跡と史跡、店と店を単につなぐコースではなく、自分が持っている高松への思い入れや、イメージをコースに盛り込む、また、高松ならではのものにストーリー性を持たせて伝えるというのが、ここで言う「線のガイド」である。

そして、これらの意見をもとに7月初めまでに各委員が高松のまちあるきを考えた企画書を提出し、25コースの案ができ上がった。そこから実施可能かどうかや内容が重複しているものを統合していく作業が行われ、最終的には15コースになった。その後、催行日や費用などの内容を具体的に詰めていくグループワークが行われ、コースの考案者であり各委員である市民ツアープロデューサーが、県や市の職員とともに商店などに直接趣旨説明や協力依頼を行い、各々が企画を進めていった。ここまでの7～8月に決定していったことである。また同時期に、イベント自体の期間が10月1日～12月2日に決定し、「たかまつ松平藩まちかど漫遊帖～そぞろ高松 ごゆるり参ろう」というタイトルやイメージキャラクターができ上がった。このタイトルには団体バス旅行のように、観光スポットだけを早足で回ってしまうのではなく、車やバスを使わずに自分の足で歩いてゆっくり高松を見て楽しんで欲しいという思いが込められていた。チラシやガイドブック、ホームページの作成も8月に外部

³ 長崎さるく博'06のホームページ<http://www.sarukuhaku.com/>を参照。

に発注し進行していた。

9月に入ると、嘶家から学ぶ話し方のガイドセミナーや現地研修として、実際に市民ツアープロデューサーにまちを案内してもらうセミナーが実施され、準備を進めていった。チラシやポスターも県内外に配布され、いよいよ本番を迎えることとなった。

(2) コース内容と実績

10月1日から12月2日の開催期間に入った。各コースの内容、定員、開催回数、総数、実際の利用者数、参加率は第2表の「コース内容と参加客数一覧」に示した。

第2表 コース内容と参加客数一覧 (2006年度)

No.	「コース名」・内容	定員	回数	総数	利用者数	参加率
1	「黄門さまのお忍びある記」 高松城のお堀、井戸、町並みの散策	10	7	70	56	80.0%
2	「屋島で考える松平藩」 屋島神社・四国村で松平藩の足跡を探る	15	6	90	15	16.7%
3	「片原町（耽溺）極小茶会」 4つのお茶屋をまわって松平の茶文化に触れる	10	4	40	42	105.0%
4	「地上113メートル「峠の茶屋」で一休み」 漆器や織物、天ぷらなど讃岐の技と味を楽しむ	10	4	40	42	105.0%
5	「粹街の鮓をつまんで歩く夕暮れ」 瀬戸内の旨い鮓を一貫ずつつまんで歩く	10	4	40	43	107.5%
6	「城下の面影・昭和のにおい」 高空空襲の戦禍を逃れた町を歩く	15	2	30	35	116.7%
7	「江戸のモダンを感じる町 仏生山」 門前町仏生山で町屋を見学しながら歩く	15	2	30	32	106.7%

まちあるき型観光の可能性

8	「讃州さぬきの高松さまの城が見えます波の上」 日本三大水城高松城を歩き、学ぶ	15	3	45	20	44.4%
9	「仏生山の語りべ「橋本タカ子」の時ばなし」 法然寺で仏生山の生き字引、橋本さんの話を聞く	15	1	15	14	93.3%
10	「高松ご城下水物語」 高松市内を水をテーマにして巡り、讃岐の水を考える	15	2	30	26	86.7%
11	「牟礼・松平ゆかりの地コース～六万寺編～」 牟礼の松平藩ゆかりの寺、史跡を歩く	15	2	30	12	40.0%
12	「牟礼・松平ゆかりの地コース～八栗寺編～」 松平藩により整備された源平古戦場などを巡る	15	2	30	2	6.7%
13	「探訪 屏風絵に描かれた世界～史跡 高松城編～」 香川県歴史博物館の学芸員が案内する高松城	30	1	30	33	110.0%
14	「探訪 屏風絵に描かれた世界～城下町編～」 香川県歴史博物館の学芸員が案内する城下町	30	1	30	59	196.7%
	合 計		41	550	431	78.4%

資料：2006年漫遊帖の申込実参加客数一覧表より加工。

注：No15のコースは利用者が自由に参加するフリープランのためデータがない。筆者はこのコースのツアープロデュースを行った。

以上のように約2ヶ月の期間中の参加客は431人で、参加率は78.4%、1回あたりの参加客数は10.5人であった。参加率が10%を切るコースもあったが、反対に100%を超えるコースも数多くあり、初回としては上出来であったといえよう。

第6章

さらに、2007年3月2日～4日にサンポート高松などで開催された「ジャパンフラワーフェスティバルinかがわ」に合わせて、香川県から漫遊帖の開催要望があり、「たかまつ松平藩まちかど漫遊帖 春編3コース」(①盆栽と桃太郎の里「鬼無のまちあるき」と苔玉づくりコース、②仏生山・花のお庭めぐりと江戸モダンなまちをあるくコース、③サンポートから栗林公園まで「たかまつ松平藩・伝統の技と味」コース)が開催された。募集定員59人に対して51人が参加し(参加率86.4%)、高松観光の一環として漫遊帖のニーズが高いことがわかった。

(3) アンケート調査の分析

全15コースのうち、高松中心部で行われた6コース(No.1, 3, 4, 5, 8, 10)について、参加客の属性や参加動機、満足度を調べて次回以降の参考資料とするため、参加客を対象にアンケート調査を行った。実施期間は2006年10月1日から12月2日で、ツアー終了後に参加客に直接記入してもらう方式をとった。参加客総数431人に対し、アンケートの回収総数は160部であった。以下ではアンケート結果の分析を行いたい。

① 参加客の性別・年齢・住所

回答者160人のうち、男性は64人(全体の40%)、女性は96人(60%)であった。年代別にみると、20歳未満は12人(8%)、20歳代は6人(4%)、30歳代は21人(13%)、40歳代は31人(19%)、50歳代は47人(29%)、60歳代は25人(16%)、70歳代は18人(11%)であった。年齢層は男女別でも、同じような傾向を示しており、40歳代と50歳代の中年層が全体の約半分を占めていた。20歳未満と20歳代が若干参加していたのは、香川大学経済学部教授もツアープロデューサーをしており、学生に漫遊帖参加をレポート課題として課していたためであったと考えられる。また、参加客の住所は高松市内が72%で最も多く、高松市

まちあるき型観光の可能性

を除く香川県内が19%、県外が9%であり、高松市在住の参加客が大部分を占めていたことが大きな特徴である。

② 誰と参加したか

誰と参加したかについては、全体では友人・知人と参加が47%と最も多く、次いで一人で参加が30%と多かった。さらに、これを男女別でみた場合、顕著な相違がみられた。すなわち、男性では、一人で参加が52%で最も多かったのに対して、女性では友人・知人と参加が65%と最も多かったのである（第3表参照）。

また、男性の参加比率の多かったコースをみると、No1「黄門のお忍びある記」（男性54%）、No8「讃州さぬきの高松さまの城が見えます波の上」（53%）、No10「高松ご城下水物語」（68%）であり、主に歴史をテーマにしたコースは男性の参加客が多いことがわかる。反対に、No3「片原町（耽溺）極小茶会」は女性が81%、No4「地上113メートル「峠の茶屋」では68%、No5「粹街の鮓をつまんで歩く夕暮れ」は76%で、食べ歩きのような「食」をテーマにしたコースは女性の参加客が多かった。

これらのことから、男性は歴史に関心が高く、単独行動が多いのに対して、女性は食に関心が高く、グループ行動が多いことがわかる。

第3表 誰と参加したか（2006年度）

	友人・知人	家族	夫婦	カップル	一人
全体	47%	8%	15%	0%	30%
男性	20%	13%	15%	0%	52%
女性	65%	7%	14%	0%	14%

③ 情報源

情報源については、一番多かったのがチラシで33%、次いで友人・知人からという口コミが30%、その他18%、新聞11%という順であった（第

4表参照)。「その他」が多かったのは、香川大学教授がツアープロデューサーをしており、講義から知ったという回答が多かったためである。

第4表 情報源 (2006年度)

	チラシ	口コミ	その他	新聞	ポスター	テレビ	ラジオ	オアシス	合計
人数	59	52	32	19	7	3	2	2	176
比率	34%	30%	18%	11%	4%	2%	1%	1%	100%

注：複数回答があるため合計の数値と回答者(160)の数異なる。

④ 参加動機

参加動機については、複数回答可で選択してもらった。「面白そうだから」が28%と最も高く、次いで「自分の知らない高松が発見できそうだから」が24%、「松平藩の歴史・文化に興味があるから」が16%であった(第5表参照)。知的好奇心を持って、漫遊帖に参加した人が多いことがわかる。また、男女別にみると、理由④の「新しい観光に興味があるから」が男性は22%(女性9%)と多く、反対に、理由⑤の「友人・知人のすすめ」では女性12%(男性5%)が多かった。

第5表 参加動機 (2006年度)

	理由①	理由②	理由③	理由④	理由⑤	理由⑥	理由⑦	理由⑧
全体	28%	24%	16%	14%	9%	4%	2%	2%
男性	23%	23%	16%	22%	5%	6%	1%	3%
女性	31%	26%	17%	9%	12%	3%	2%	1%

注：理由①～⑧の具体的内容は以下のものである。なお複数回答可である。

理由①：面白そうだから

理由②：自分の知らない高松が発見できそうだから

まちあるき型観光の可能性

理由③：松平藩の歴史・文化に興味があるから

理由④：新しい観光に興味があるから

理由⑤：友人・知人のすすめ

理由⑥：まちづくりの1つの方法だと思うから

理由⑦：低価格だったから

理由⑧：その他

⑤ 満足度

ツアーの満足度（5段階評価）については、「全体的に今回のツアーに満足している」が4.57と最も評価が高く、次いで「コースの内容は魅力的だった」（4.54）、「ガイドに満足している」（4.53）の順であった。一方、最も評価が低かったのは「参加金額は適当の価格である」（4.01）であった（第6表参照）。全ての質問で満足度が平均で4点以上であったことから、参加客の満足度は非常に高かったといえる。また、男女別で大きな違いはみられなかった。

第6表 満足度（2006年度）

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
4.54	4.53	4.06	4.26	4.01	4.57	4.38

注：質問項目①～⑦の具体的内容は以下のようである。

- ①コースの内容は魅力的だった
- ②ガイドに満足している
- ③時間配分はちょうどよかった
- ④歩いた距離はちょうどよい長さだった
- ⑤参加金額は適当の価格である
- ⑥全体的に今回のツアーに満足している
- ⑦他のコースも参加したいと思った

⑥ 良かった点・不満な点

参加客に良かった点や不満な点を自由記述してもらったところ、良

第6章

かった点で一番多かったのが「店主の話が聞けた」(21票)であった⁴。次いで「普段聞けない説明が聞けた」(20票)、「高松の再発見ができた」(19票)が多くみられた。一方、不満な点で一番多かった意見は「休みだったお店があった」(7票)であった。これは、コースで訪れるはずだったがお店が臨時休業した日があったためである。次に多かったのが「詳細を事前に知らせてほしい」(6票)、「宣伝が足りない」(6票)であった。

⑦ アンケートのまとめ

アンケート結果から、漫遊帖の客層の中心は高松市内の中年層であり、男性は歴史に関心が高く、単独参加が多く、女性は食に関心が高く、グループ参加が多いことが明らかになった。参加客の満足度も非常に高かった。また、参加動機として「自分の知らない高松が発見できそうだから」や「松平藩の歴史・文化に興味があるから」といった高松の地域資源(歴史・文化など)への関心の高さがあったことがわかり、満足度も非常に高かったので、高松の地域資源の発掘・活用に貢献できたと考えられる。さらに、自由記述で多かった「店主の話が聞けた」、「普段聞けない説明が聞けた」という意見からは、まちのにぎわいづくりのきっかけになったともいえよう。

(4) 収支の状況

漫遊帖の収入と支出についても述べておく。予算のほとんどは県・市からの補助金であり、チラシやパンフレットの印刷費、拡声器などの備品の購入はその補助金で賄っていたのが実状である(第7表参照)。

⁴ 自由記述の内容からいくつかの共通する項目を作り、集計した。

まちあるき型観光の可能性

第7表 高松松平藩歴史・文化探訪協議会収支決算（2006年度）

（収入）

区 分	決算額（円）	備 考	比率
香川県補助金	3,000,000	21世紀の観光地づくり 支援事業補助金	47%
仏生山大名行列負担金	2,500,000	10月21日～22日開催	39%
源平屋島地域運営協議 会負担金	500,000	源平の里オータムフェ スティバル（11月開催）	8%
漫遊帖まちあるき参加料	326,175	12コース開催 （10月1日～12月2日）	5%
「ジャパンフラワーフェ スティバル協賛」まち あるき3コース参加料	65,900	3コース開催 （3月2日～4日）	1%
漫遊帖フォーラム参加料	21,600	3月11日開催	0%
預金利息	1,033		0%
計	6,414,708		100%

（支出）

区 分	決算額（円）	備 考	比率
報償費	36,100	ガイド報酬（本開催・ 春編）	1%
印刷費	2,564,201	ポスター・チラシ・パ ンフレット作製費	40%
消耗品費	199,165	のぼり代・事務用品代・ 拡声器等	3%
手数料	302,296	申込代行手数料・各立 寄りへの店支払い	5%
保険料	22,865	まちあるき安全保険料	0%

第6章

委託料	3,140,081	・高松秋のまつり等実施 ・HP作成委託	49%
使用料	150,000	フォーラム会場使用料	2%
予備費	0		0%
計	6,414,708		100%

注：印刷部数：チラシ 20,000枚
パンフレット 10,000冊
ポスター ことடன்車内吊り 150枚
A1大ポスター 400枚

収支ともに641万4,708円となっているが、漫遊帖は2006年度途中でできた事業であったので、当初高松市の予算がなかった。そこで、他の事業予算を組み込んで収支決算を行ったので、収支は漫遊帖のみの純粋な収支決算にはなっていない。実際の収支は約300万円であった⁵。

漫遊帖のみの収支決算ではないが、収入の94%が補助金で、残りの6%が参加料収入である。一方、支出の40%はチラシなどの印刷費が占めており、まちあるき事業では一番大きな支出になる（委託料は「高松秋のまつり」などを含んでいるので、漫遊帖の純粋な委託料支出ではない）。先にみたアンケートで情報源の38%はチラシとポスターであったことから、その役割は大きい。補助金がなくなれば印刷費を捻出することも困難になる。自主財源の獲得が求められるところであろう。また、参加料とガイド報酬についての詳しい仕組みは、2007年度の収支のところで説明する。

⁵ 高松市観光課への聞き取りによる。

(5) 漫遊帖(2006年度)の総括

以上のことから2006年度の漫遊帖の総括をすると、当初の目的であった「地域資源の活用と発掘」と「まちのにぎわいづくり」は達成されたと考えられる。アンケート調査で参加客の動機として、「自分の知らない高松が発見できそうだから」や「松平藩の歴史・文化に興味があるから」といった高松の地域資源への関心の高さや、満足度の高さから、高松の地域資源の発掘・活用に貢献できたと考えられる。さらに、自由記述で多かった「店主の話が聞けた」、「普段聞けない説明が聞けた」という意見からは、まちのにぎわいづくりのきっかけになったともいえよう。

また、今回高松市民である漫遊帖の各委員が市民ツアープロデューサーとしてコースの立案をし、ガイドまで務めた。ガイドの評価も高かったことから、プロのガイドでない市民ツアープロデューサーの活躍も立証された。

その一方で、課題としては、「交通安全などの配慮から15人程度が妥当である」、「漫遊帖の開催を知らない人が多かったので効果的な宣伝方法について再考する」、「当日キャンセルが出て赤字になるケースもあった」、「予定より大幅に時間が延びてしまった」という意見が2007年1月の反省会で出た。まちあるきという形態上、大人数でまち中を歩くのはもちろん危険である。また、ガイドも大人数が相手になると参加客の安全に気を配ったり、ついてきているかなど気を回したりと大変であった。また、参加料金は当日支払ってもらうようにしていたので、事前に参加客への商品を購入していた場合、当日キャンセルが出てしまうと、市民ツアープロデューサーが自費で買い取ることもあった。

また、3月には、2007年度の漫遊帖に向けて「漫遊帖フォーラム」が開かれた。これは会議のような堅苦しいものではなく、ツアー参加客にも参加してもらい、2006年度の反省やこれからの漫遊帖を考えるものだった。このフォーラムでは以下の3つのことが論点となった。1つ目

は、単なる歴史解説だけではなく、「楽しかった」「また参加したい」という思いになってもらうために、協力店・市民ツアープロデューサーは「もてなす」ということの意味を見直すことだった。そのために、参加客にもフォーラムに参加し、感想を聞けるようにした。2つ目は、新しいツアーへのヒント収集・プロデューサー候補の確保であった。行政側が働きかけ、さぬき市の志度や坂出市、丸亀市でまちあるきを開催しようとしている人々にも参加してもらい、意見交換、情報交換を行った。3つ目は、フォーラム参加者が今後も漫遊帖の核になるように、自分たちの漫遊帖なのだという意識をもってもらうことであった。会議では出席者間で忌憚ない意見交換ができるように、街中のカフェでフォーラムという形式をとった。ツアーで起こった問題や悩みを市民ツアープロデューサー同士が共有しあうことで、仲間意識の再確認ができ、2007年度に向けてやる気を起こせたように筆者は思う。

3. 漫遊帖（2007年度）の実施

（1）漫遊帖（2007年度）の実施まで

2006年度の漫遊帖の目的は、地域資源の活用・発掘とまちのにぎわいづくりであった。2007年度はそれを高松市の中心部だけではなく、合併した市全体に広げるために新たな地区にも漫遊帖の参加を呼びかけた。コースが増えることによってバリエーションが増え、様々なニーズに応えられるようになる。さらに、新市区域は漫遊帖をまちおこしのきっかけにし、その地域のファンを増やしてほしいという目的もあった。

また、漫遊帖の組織については、将来的に行政の資金援助から自立できるような組織化を目指した。そのためにはリーダーが必要ということになり、前年度から中心となって活躍していたS氏を副委員長とし、さらに総合プロデューサーという全コースをチェックする役職を新たに設置し、前年度から深く関わり、「漫遊帖」というタイトルを考案したR

まちあるき型観光の可能性

氏が就いた。また、将来、自主運営できるように会議で使用する紙などの事務局費をツアーの参加料金に最初から組み込むことにした。

では、このような目的をもった2年目の漫遊帖はどのように進んでいったであろうか。(第8表参照)

第8表 進行スケジュール (2007年度)

	進行スケジュール
4月	新規コース開拓のため、塩江・香南・国分寺などへ協力依頼を行った 2007年度第1回会議で今年の活動コンセプトがまとまった
5月	市民ツアープロデューサー養成講座開講
6月	新メンバー加入 有料ガイドに抵抗を持つ人も現れた 各市民ツアープロデューサーはコースプランを練った
7月	全34コースが出揃った 長崎・別府への視察研修 ガイド講習, プレッチャー
8月末	チラシ完成 ガイド講習, プレッチャー
9月中旬	ガイドブック・ホームページ完成 ガイド講習, プレッチャー
10～11月	開催期間
1月	役員反省会
2月	全体反省会
3月	漫遊帖フォーラム

第6章

先ず、2007年4月に、新規コースをつくるため、市職員と会の副委員長が市内の塩江・香南・国分寺町のボランティアガイドや婦人会に漫遊帖の参加依頼をし、漫遊帖に興味を持った人は5月に行われた「市民ツアープロデューサー養成講座」に参加してもらった。「市民ツアープロデューサー養成講座」とは、有料の3回講座で、1回目は基本的な高松松平藩の歴史・文化を学び、2回目はリーダーの副委員長が司会役で、2006年度の漫遊帖のビデオ鑑賞や参加者によるディスカッションを行った。3回目は実際にまちに出て漫遊帖を体験し、最終的に講座終了後に参画の意思を確認するというものであった。

4月末に2007年度の漫遊帖第1回会議が開かれ、年間スケジュールが発表された。2006年度の反省から、早めにチラシやパンフレット、ポスターを準備して広報活動を充実させるため、昨年より準備期間に余裕が持たれていた。そして、活動コンセプトについて、漫遊帖は誰でもできない「商品」をつくること、2年目は市民ツアープロデューサー各々が「個人商店」で、お互いがライバルであるという意識でやっていくということにまとまった。また、2007年度より、イベントなどで漫遊帖を使用する場合は「漫遊帖名義申請書」を事務局へ提出することになった。名義の悪用を防止するためと、提出によりイベントの開催を各委員に周知して情報を共有するためであった。

6月に行われた会議では、5月に養成講座を受講した新たなメンバーも加わった。しかし、ここで問題が生じた。新メンバーの中には、今までずっとその地域でボランティアガイドを務めていた人もいた。そのような人は有料でガイドをすることに抵抗があったようだ。漫遊帖の料金設定はガイドに任されているが、事務局手数料として200円、保険料50円は必ず徴収し、そこから必要経費やガイド料を上乗せすることになっていた。少しでもガイド料をもらうことによって、ガイドは参加客に満足して帰ってもらわなければならないという責任感が生まれる。無料だとどうし

まちあるき型観光の可能性

でも「ガイドしてあげている」という考え方から抜け出せないということをなかなか理解してもらえなかった。結局、理解したというよりも仕方なく了承してもらったという形になった。

6月から7月初旬にかけては、各市民ツアープロデューサーは自分が紹介したいまちのコースを考え、商店などに協力依頼を行い、まとまったコースプランを事務局へ提出した。でき上がったコースは全部で34コースになり、2006年の15コースに比べると倍以上に増えた。また、2006年にも行われた長崎さるく博と別府路地裏散歩への視察研修が7月に行われた。7月中旬には、チラシやパンフレットに載せる価格や歩く距離などを最終的に決定し、8月末にはチラシが、9月中旬にはガイドブックとホームページができ上がった。さらに、コースができ上がったら、どのコースも知り合いなどを呼んで、実際に本番と同じようにやってみるプレツアーを行った。総合プロデューサーは全コースのプレツアーをチェックし、アドバイスをしたり、修正点を指摘した。そして、9月29日から本番を迎えることとなった。

(2) コース内容と実績

準備期間を終え、9月29日から12月2日の開催期間に入った。各コースの定員、開催回数、総数、実際の利用者数、参加率は以下のようであった(第9表参照)。

第9表 コース内容と参加客数一覧(2007年度)

No.	コース名	定員	回数	総数	利用者数	参加率
1	感じる味わう さぬき漆	10	4	40	31	78%
2	きなし桃太郎のまちで盆栽を知る	10	5	50	48	96%
3	黄門さまのお忍びある記 part 2	8	3	24	25	104%
4	粹と和 やすらぎの午後	7	8	56	27	48%

第6章

5	お寺って歴史のワンダーランド	10	6	60	58	97%
6	仏生山、魅力をぎゅっと一絞り	10	4	40	41	103%
7	殿、外堀あたりまで参りましょ。	8	9	72	56	78%
8	出来屋茶会	15	2	30	24	80%
9	東谷深呼吸「日本のまほろば」	6	1	6	4	67%
10	こころカラダ ちょっと癒して仏生山	5	2	10	10	100%
11	学生のカンガエル アットホーム	6	1	6	6	100%
12	風を切って。たかまつ再発見!	10	6	60	30	50%
13	昭和33年の伝統とモダニズム	10	3	30	29	97%
14	元祖まちづくり 香西むきむきの町	10	2	20	27	135%
15	楠明子の「しおのえ事始め」	12	2	24	17	71%
16	屋島山頂で、ご来光に出会う!	20	1	20	9	45%
17	八栗寺に空海のこころを見る	15	1	15	15	100%
18	下町どおり きものでお散歩	5	3	15	5	33%
19	ジロー・ANNRIと訪ねる男木島	12	1	12	12	100%
20	Deep in むれ	14	1	14	10	71%
21	はじめての香南町	15	2	30	18	60%
22	北浜発 こんな素敵な人、こんな素敵な場所	15	1	15	15	100%
23	水の回廊 もうひとつの街	10	2	20	21	105%
24	夕日ながめる 屋島銀座	20	1	20	6	30%
25	よし!今日は落語だ。笑って終わろう	4	1	4	4	100%
26	きままに四国村	15	1	15	15	100%
27	ものづくりたちの生み出したもの	20	1	20	26	130%
28	歴史かさなる扇町 ふ・ら・り	10	3	30	21	70%
29	ほろ酔い夕暮れ 松島町	5	2	10	15	150%
31	満開の彼岸花と六万寺に遊ぶ	15	1	15	4	27%
32	塩江岳八幡ハイキング	20	2	40	18	45%

まちあるき型観光の可能性

33	稲田先生とあるく遍路道	30	1	30	31	103%
34	緋色天幕寄席	25	1	25	21	84%
	合 計	407	84	878	699	79.6%

資料：2007年漫遊帖の参加人数実績表より加工。

注：詳しいコース内容はたかまつ松平藩まちかど漫遊帖イベントガイドブック、2007年を参照。

：コースNo.28～34は番外編1～7を指す。

：コースNo.30円光寺「仏生山まるる山ライブ」は200人集まったライブイベントであり、まちあるき型観光とは相違するため除外した。

：筆者はNo.4, No.18の市民ツアープロデューサーを務めた。

以上のように約2ヶ月にわたる期間中の参加客は699人で、参加率は79.6%、1回当たりの参加客数は8.3人であった。2006年度の参加客は431人であったので、参加客総数は1.6倍に増えた。また、2006年度は参加率が10%未満のコースもあったが、2007年度では最低でも27%であった。しかし、全体の参加率を比べてみると2006年度の参加率は78.4%であったので、参加率はほぼ横ばいであった。1回当たりの参加客数は10.5人から8.3人となり、少人数型ツアーの特徴がより強くなった。また、参加率が100%を超えるコースが2006年度では14コース中7コースあったのに対して、2007年度では33コース中14コースであった。

(3) アンケート調査の分析

アンケートは全34コースのうち、アンケート記入が可能な30コースを対象に行った。実施期間は2007年9月29日から12月2日で、ツアー終了後に参加客に直接記入してもらい、その場で提出してもらうか、後日ファックスで事務局へ返信してもらった。参加客総数699人に対し、アンケートの回収総数は528部であった。ほとんどのコースでアンケートを取ることができたので、漫遊帖全体の客層や満足度をより正確に知る

第6章

ことができた。アンケートの質問項目は基本的に前年度を踏襲している。

① 参加客の性別・年齢・住所・リピーター

回答者528人のうち男性は34%、女性は66%であった。年齢別にみると、20歳未満は53人(10%)、20歳代は35人(7%)、30歳代は49人(9%)、40歳代は93人(18%)、50歳代は86人(17%)、60歳代は139人(27%)、70歳代は55人(11%)、80歳代は7人(1%)であった。2006年と同じく40歳代、50歳代、60歳代が客層の中心である。また、参加客の住所は高松市内が77%と最も高く、高松市を除く香川県内が17%、県外が6%であった。昨年同様に高松市在住の参加客が大部分を占めていた。また、2006年度の漫遊帖のツアーに参加し、2007年度にも参加したリピーターは88人で、全体の17%であった。

② 誰と参加したか

誰と参加したかについては、全体では友人・知人と参加が最も多く、次いで一人で参加が多かったこと、男女別でみた場合、男性では一人で参加が最も多かったのに対して、女性では友人・知人と参加が最も多かったことは2006年度と同様であった(第10表参照)。

第10表 誰と参加したか (2007年度)

	友人・知人	一人	家族	夫婦	その他
全体	46%	31%	11%	11%	0%
男性	28%	48%	8%	16%	0%
女性	56%	22%	14%	8%	1%

女性参加客が66%と大部分を占める中で、コースNo.16、17、19、28は男性参加客の方が多かった。No.16は屋島登山と歴史散策、No.17は85番札所八栗寺を訪ねるコース、No.19は古事記や日本書紀に記されている物

まちあるき型観光の可能性

語の舞台ともいわれる男木島で古代の史跡を歩くコース、No28は江戸・明治の建物が点在する扇町を歩くコースである。2006年度の分析から男性は歴史に関心が高いことがわかったが、2007年度も同様であった。また、これらの男性参加客が多かったコースは屋島、牟礼、男木島など高松市中心部から離れた遠隔地という特徴もある。特に、男木島はフェリーでの移動を伴うものである。男性は女性に比べて遠隔地に出かけることはあまり苦ではないようである。

③ 情報源

情報源については、一番多かったのが友人・知人からの口コミで44%、次いでチラシが27%、その他11%という順であった（第11表参照）。全体として、コストがかかるチラシやポスターより友人・知人からの口コミの占める比率が高いのが特徴ある。また、年齢別でもほぼ同様の傾向であった。しかし、リピーターの情報源はチラシが35%と最も高く、次いで友人・知人からの口コミ（28%）であった。リピーターは去年も参加していたので、意識的にチラシを手にとってくれたのであろう。

また、2006年度にも漫遊帖が開催されていたことを知っていた参加客は45%であった。参加客の半分近くは去年の開催を知っていたことになる。リピーターが17%であったことを考えると、漫遊帖の認知度は低くはないと考えられる。さらに、2007年度において2コース以上に参加した客は31%であった。この参加客もまたリピーターと考えられる。

第11表 情報源（2007年度）

	友人・知人	チラシ	その他	ポスター	新聞	H P	テレビ	ラジオ	合計
人数	267	166	67	30	28	26	22	1	607
比率	44%	27%	11%	5%	5%	4%	4%	0%	100%

④ 参加動機

参加動機については、複数回答可で選択してもらった。「面白そうだから」が27%と最も高く、次いで「自分の知らない高松が発見できそうだから」が23%、「高松の歴史・文化に興味があるから」が18%であり、2006年度とほとんど変わっていない（第12表参照）。

だが、年齢別にみると、年齢によって異なった傾向がみられた。20歳代から50歳代では「面白そうだから」が最も多い参加動機だったのに対し、60歳代から80歳代では「自分の知らない高松が発見できそうだから」が最も多く、また、「高松の歴史・文化に興味があるから」も多い。年齢が上がるにつれ、知的好奇心の対象が明確になるようである。また、リピーターについてみると、「去年参加して面白かったから」が15%と比較的高く、2006年度の満足度が高かったことが2007年度の参加につながっている。男女別では大きな相違はなかった。

第12表 参加動機（2007年度）

	理由 ①	理由 ②	理由 ③	理由 ④	理由 ⑤	理由 ⑥	理由 ⑦	理由 ⑧
全 体	27%	23%	18%	15%	10%	3%	1%	3%
20歳未満	26%	16%	13%	11%	15%	0%	0%	18%
20歳代	35%	17%	7%	27%	10%	0%	0%	5%
30歳代	32%	14%	19%	17%	16%	0%	0%	1%
40歳代	35%	20%	15%	8%	13%	7%	2%	3%
50歳代	27%	26%	20%	13%	6%	7%	1%	1%
60歳代	23%	26%	20%	18%	9%	2%	0%	3%
70歳代	18%	28%	25%	22%	5%	2%	1%	0%
80歳代	0%	29%	14%	29%	14%	14%	0%	0%

注：理由①～⑧の具体的内容は以下のようである。なお複数回答可である。

まちあるき型観光の可能性

- 理由①：面白そうだから
- 理由②：自分の知らない高松が発見できそうだから
- 理由③：高松の歴史・文化に興味があるから
- 理由④：友人・知人のすすめ
- 理由⑤：新しい観光、またはまちづくりなどに興味があるから
- 理由⑥：去年参加して面白かったから
- 理由⑦：去年参加した人のすすめ
- 理由⑧：その他

⑤ 満足度

ツアーの満足度（5段階評価）については、「ガイドに満足している」が4.59と最も評価が高く、次いで「全体的に今回のツアーに満足している」（4.51）、「コースの内容は魅力的だった」（4.44）の順であった。この上位3つは昨年度と同様である。2006年度は満足度3位だった「ガイドに満足している」が2007年には1位になった。これは、2007年度はボランティアガイドとして経験豊富なガイドが加わり、去年からのガイドも成長した結果であると考えられる。一方、最も評価が低かったのは「参加金額は適当の価格である」（4.22）であり、これも昨年度と同様であった（第13表参照）。2007年度も全ての質問で満足度が4点以上であったことから、参加客の満足度は非常に高かったといえる。

また、男女別やリピーターの満足度に大きな相違がなかった。年齢別の満足度では20歳未満が4点を下回ったが、他には大きな相違がなかった。20歳未満の参加客の多くは香川大学の授業の一環で参加した人であるが、そのように自主的参加でなかったために満足度が高くなかったことと、若年層の参加が少ないことなどから、漫遊帖のようなまちあるき型観光は若年層がターゲットではないと考えられる。

第13表 満足度 (2007年度)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
全体	4.44	4.59	4.27	4.27	4.22	4.51	4.27
20歳未満	4.12	4.33	3.88	3.67	3.69	4.08	3.42
20歳代	4.39	4.56	4.18	4.08	4.08	4.52	3.92
30歳代	4.63	4.71	4.30	4.42	4.26	4.59	4.42
40歳代	4.41	4.55	4.21	4.20	4.10	4.49	4.39
50歳代	4.41	4.55	4.37	4.20	4.23	4.49	4.33
60歳代	4.45	4.69	4.36	4.40	4.44	4.62	4.48
70歳代	4.69	4.74	4.47	4.69	4.45	4.73	4.35
80歳代	4.14	4.57	3.86	4.40	4.29	4.29	4.29

注：質問項目①～⑦の具体的内容は以下のようである。

- ① コースの内容は魅力的だった
- ② ガイドに満足している
- ③ 時間配分はちょうどよかった
- ④ 歩いた距離はちょうどよい長さだった
- ⑤ 参加金額は適当の価格である
- ⑥ 全体的に今回のツアーに満足している
- ⑦ 他のコースも参加したいと思った

⑥ 良かった点・悪かった点

良かった点については、「高松や住み慣れたまちの新しい発見・再発見ができた」が71票と最も多く、次いで「ガイドが良かった」(63票)、「楽しかった、面白かった、良かった」(55票)、「体験が良かった」(25票)、「勉強になった」(21票)、「また参加したい」(16票)、「景色・自然が良かった」(10票)の順で多かった。一方、悪かった点は「お寺の説明をもっと聞きたかった」など、コースの具体的な改善点について、それぞれ1, 2票であった。

⑦ アンケートのまとめ

アンケート結果から昨年度と同様、客層の中心は高松市内の中年層で

まちあるき型観光の可能性

あり、男性は、単独参加で歴史に関心が高く、女性はグループ参加が多いということが明らかになった。参加客の満足度も非常に高かった。また、友人・知人からの口コミやチラシが主な情報源であった。これらのことは、漫遊帖のようなまちあるき型観光を楽しむ客層が高松市のような地方都市においても確実に存在していることを示している。

ところで、2007年の目的は地域資源の発掘・活用やまちがにぎわうきっかけづくりを高松市の中心部だけではなく、市全体に広げることであった。参加動機で「自分の知らない高松が発見できそうだから」が多く、また、自由記述でも「高松や住み慣れたまちの新しい発見・再発見ができた」が最も多かったので、地域資源の発掘・活用という目的は達成できたといえる。また、「楽しかった、面白かった、良かった」や「また参加したい」からは、まちのにぎわいづくりに貢献できたといえよう。さらに、もう1つの目的であった、新市区域では漫遊帖をまちおこしのきっかけにし、その地域のファンを増やすということについては、長期的にみなければわからないことであり、今回のアンケート結果から結論を出すことはできない。

(4) 収支の状況

まず、参加客からの参加料の内訳をみたい。以下は筆者がガイドを務めたツアー（No.18）の一人当たり参加料の内訳である（第14表参照）。

第14表 一人当たり参加料の内訳

項 目		金額（円）
事務局徴収分	事務局手数料	200
	保険料	50
	受付代行手数料	100

第6章

コース必要経費	昼食代	900
	写真現像代	150
	資料代	240
小 計		1,640
報償費	ガイド料	360
合 計		2,000

事務局手数料とは、2007年度から導入したもので、将来の自主運営に向けて会議で使用する紙代などを参加料に組み込んだものである。200円という額は暫定的なものである。全てのコースが、この事務局手数料と保険料（50円）あわせて250円を事務局に収めなくてはならないので、250円が参加料の最低金額であった。そこから、コースごとによって昼食代、体験メニューを組み込んでいけば体験費用、または入場料などの必要経費が上乘せされていく。さらに、ガイド料は市民ツアープロデューサーが各自で自由に設定できるようになっており、筆者の場合2,000円というきりがよかったことと、ガイド料を多く取れる自信がなかったため、360円という少額にした。これが参加料の内訳例である。

次に、2007年度の収支の状況を見る（第15表参照）⁶。

⁶ 収支の状況は、年度途中の2008年2月末時点での状況であり、支出部分の残高340,769円はこの時点ではまだ区分できない。したがって、収入と支出の額はその分だけ差額が生じている。

まちあるき型観光の可能性

第15表 高松松平藩歴史・文化探訪協議会収支決算 (2007年度)

(収入)

区 分	決算額 (円)	備 考	比率
香川県補助金	2,100,000	21世紀の観光地づくり支援事業補助金	43%
高松市補助金	2,500,000		51%
漫遊帖まちあるき参加料	284,431	市民ツアープロデューサー養成講座参加料・漫遊帖事務局徴収	6%
広告料等収入	0		0%
雑入	905	漫遊帖コース参加料残金返上分	0%
繰越金	0		0%
預金利息	195		0%
計	4,885,531		100%

(支出)

区 分	決算額 (円)	備 考	比率
報償費	0		0%
消耗品費	272,937	ユニホーム・のぼり・小旗作製費	6%
印刷製本費	3,267,890	ポスター・チラシ・パンフレット作製費	72%
通信運搬費	990	データCD送付料等	0%
広告料	0		0%
手数料	52,900	参加受付代行料 (JR四国)・オープニング市長参加料	1%
保険料	48,320	市民ツアープロデューサー講習会参加客・まちあるき参加客安全保険料	1%

委託料	677,355	漫遊帖WEBサーバー使用料・制作管理料	15%
使用料	6,180	会議会場使用料	0%
備品購入費	218,190	ギガホン購入費	5%
予備費	0		0%
計	4,544,762		100%

収入は昨年度と同様に、県と市からの補助金がほとんどで他に参加料からなる。一方、支出については、72%と大部分がチラシ、パンフレットなどの印刷製本費である。次いで漫遊帖WEBサーバー使用料などの委託料が15%を占めている。

また、ここで来年度以降の予算（補助金）削減を見越して今後について検討しておきたい。消耗品費や備品購入費は、初期投資であり来年度以降はなくなる支出であるが、印刷製本費や委託料は抑えることはできても、なくせない支出である。今後はチラシ、パンフレットなどの印刷部数を減らしたり、紙質を落としたりするなどの対応が求められるであろう。参加料で印刷製本費まで賄えるようになれば、漫遊帖も継続可能になるが、それはなかなか難しい。なぜなら、まちあるきは金額をあまり高く設定できないからである。参加客は、歩きながらまちの紹介をしてもらうツアーに、現時点では4,000円～5,000円も払わないだろう。アンケート結果でも、2年連続で設定金額の満足度が最も低かった。将来的に、参加料が高くて参加してもらえるような魅力あるコースを作っていくことも重要であるが、参加料以外の収入として、増やすべきなのが広告料であろう。補助金に頼らずに運営していくためには、企業等からの広告料で、参加料以外の収入を増やすことを今後は積極的に考えていくべきであろう。現在は補助金や事務局を高松市観光課が担っている

まちあるき型観光の可能性

など行政主体であるが、民間主体の事業のほうが企業等からの広告料をとりやすくなるので、そのためにも早く行政に頼らず自主運営できるようにするべきである。

(5) 漫遊帖（2007年度）の総括

2007年の総括をすると、外面的な進歩と内面的な問題発生との1年だった。進歩については、参加客数は1.6倍に増加し、市民ツアープロデューサーの数も34人から67人に増えた。2006年度の反省から平日開催を増やしたり、午後からツアーを組むなど、曜日や時間設定に関して客の立場に立ったスケジュールが組めるようになった。

しかし、内面的な問題については、市民ツアープロデューサーの増加がいくつかの問題を起こすこととなった。例えば、様々な価値観を持った人が集まったことにより、意思統一に時間がかかったことである。前で述べたように、ガイドを有料とすることを巡って意見のぶつかり合いが生じた。また、市民ツアープロデューサーが多くなって、会議に人が集まらないという結果、イベント期間中の11月に意思決定機関として役員会を新たに設置した。役員会とは市民ツアープロデューサーの代表として組織された意思決定機関で、実行委員会委員長、総合プロデューサー、顧問、そして地域ごとに分かれたブロック代表6人から構成されている。この役員会の位置づけについては、2008年度以降検討されていくだろう。さらに、2007年度はチラシなどの配布を早く完成させ、イベントの周知を徹底させる予定であったが、市民ツアープロデューサーが増えたことによって、結局チラシが出来上がったのは2006年度と同じ時期であった。このように、人数が増えたことによって新しい問題が生じたのである。2008年度は、新しい市民ツアープロデューサーは募集せず、役員会・市民ツアープロデューサー全体会をより充実させていく方針である。

第6章

さて、2007年の目的は地域資源の発掘・活用やまちがにぎわうきっかけづくりを高松市の中心部だけではなく、市全体に広げることと、新市区域は漫遊帖をまちおこしのきっかけにし、その地域のファンを増やすということであった。実際に開催地区は高松市中心部だけではなく、新たに香西、鬼無、さらには香南など新市区域にも広がり、アンケートでも「自分の知らない高松が発見できそうだから」参加した人が多かったように、高松市の地域資源を発掘、活用できたといえる。新市区域に漫遊帖が広がったことにより、新市区域の良さを新発見した人が増えたということは、まちがにぎわうきっかけづくりになったといえるだろう。漫遊帖がまちおこしのきっかけになったかどうかは、現時点ではわからないが、参加客の満足度も高く、「楽しかった、面白かった、良かった」などの意見も多かったので、地域のファンは増えたに違いない。

4. おわりに一まちあるき型観光の可能性一

最後に、これまでの分析を踏まえて、まちあるき型観光の可能性を示したい。

アンケート結果から9割以上が県内からの客（特に高松市内）であったように、漫遊帖のようなまちあるき型観光は、県内客に人気があるが、県外観光客には人気がない。住んでいるところが観光の舞台になるのだから、そこに住む人にとっては興味深いものであろう。それは参加動機で「面白そうだから」、「自分の知らない高松が発見できそうだから」が多かったことからわかる。しかし、県外客にとっては、市民の生活の場よりもいわゆる観光地を見たいのであろう。漫遊帖も県外観光客向けに旅行会社とタイアップして旅行商品化する動きも出てきているが、まちあるきは少人数型旅行商品であり、団体客への対応は難しいのが実状だ。少人数だからこそ、ガイドやお店の人との交流が可能になり、それが魅力の1つになっているのである。まちあるき型観光は県内

まちあるき型観光の可能性

客向け・少人数型と考えたほうがいいのではないだろうか。

まちあるき型観光の可能性は、どこのまちでも地域資源の発掘・活用ができ、まちのにぎわいづくりのきっかけとなり、また、郷土愛を育むことができることである。まちあるきは、あまり知られていない場所や名産品、歴史などを紹介するもので、どこでも実施でき、特別な土地である必要がない。今までまちの商店が観光対象として紹介されることはなかったが、まちあるきで紹介することによって、十分面白いと感じてもらえる観光資源になることが漫遊帖で立証された。新しい観光施設をつくるのではなく、もともとある地域資源の発掘・有効活用になり、まちあるきで紹介されることによって、商店のリピーターが増えることは、まちのにぎわいづくりにつながる。

また、地域の人が住んでいるまちの良さを再発見することにより、誇りを持てるようになれば郷土愛を育むことにもつながる。実際、筆者も市民ツアープロデューサーとして参加し、市民ツアープロデューサーのメンバー、商店街の人々、参加客など、多くの人と出会った。様々な考え方、価値観を持った人と出会い、香川の良さや温かさを知ることができた。今では本当に香川が好きだといえる。

地域資源の発掘・活用、まちのにぎわいづくり、郷土愛の育成が可能なまちあるき型観光は、大きな経済効果を期待するものではなく、地域が元気になる、自分の住んでいるまちが好きになる地域活性化の第一歩なのである。

〈参考文献・参考サイト〉

高松松平藩歴史・文化探訪協議会各種資料

たかまつ松平藩まちかど漫遊帖イベントガイドブック、2006年版および

2007年版

エンジョイ香川 <http://www.21kagawa.com/udon-t/index.html#>

たかまつ松平藩まちかど漫遊帖～そぞろ高松 ごゆるり参ろう

<http://matsudaira.levtex.net/>

日本ではじめてのまちあるき博覧会 長崎さるく博'06

<http://www.sarukuhaku.com/>